

南足柄市立岩原小学校

研究テーマ：子どもの主体性を育成する授業の創造
～探究的な課題の設定と問いの連続性を大切にした単元構成～

1 実践の目的

本校では、令和4年度から令和6年度まで「考えを伝え合い、学びを深め合う児童の育成」を研究テーマとして研究を進めてきた。「学びの深まり」を実現するための指導の工夫改善を繰り返してきたことで、自分の考えを再考・熟考したり、振り返りの中で日常生活に生かせることを積極的に考えようとしたりする姿が見えてきた。一方で、児童が取り組んでみたいと思える学習課題が設定できていないことや、児童同士の関わり合いの中から学びを深めたり、再び問いを生み出したりしていくことなどに課題が見られた。そこで今年度は、総合的な学習の時間と生活科の授業を窓口として「やりたい、取り組みたい、学びたい、考えたい、伝えたい、話し合いたい、聞いてみたい」などといった児童が前のめりに学習に取り組もうとする姿や、自ら「問い」を見出し、課題解決に向けて追究・探究しようとする姿をめざして研究を進めることとした。

2 実践の内容

(1) 児童にとって魅力のある課題設定

本実践においては、児童一人ひとりが学習への意欲を高め、主体的に取り組めるようにするために、課題の設定を工夫した。まず、児童の日常生活や身近な地域の出来事と関連づけ、学びの意義を実感できるようにした。また、児童が「自分ごと」として捉えられるよう、問いかけの形で課題を提示するなど、答えが一つに定まらない探究的な内容とした。さらに、課題解決の見通しを

もつ場面では、児童自身が「なぜだろう」「もっと調べたい」と思えるような資料や具体的事例を提示し、学習への入口を魅力あるものにするように意識してきた。

総合的な学習の時間においては、児童が実社会や実生活に向き合う中で、自ら課題意識をもち、その意識が連続発展することを重視している。そのため、児童の思考の流れをストーリー化(図1)してイメージし、学習対象との関わり方や出会わせ方などを、教師が工夫してきた。特に、地域素材を活用することは、自分たちの住んでいる地域の新たな発見や、地域の人々との出会いを通していろいろな生き方・考え方を知ることにつながる。また、地域に愛着が生まれ、地域をよりよくしようとする心を育むことができるため、課題解決の過程においても大切にしていく。

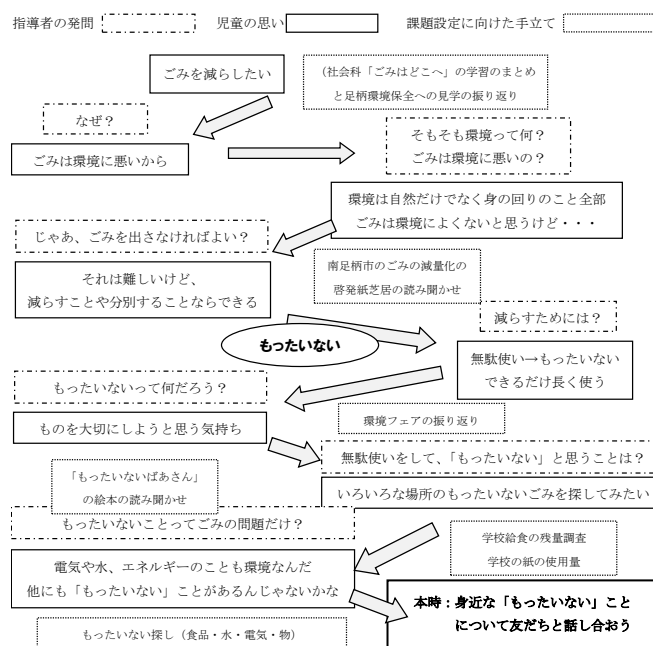


図1 課題設定のストーリー

(2) 問いの変容と問いの連続性

児童が課題解決に向けて生み出した「問い」を学習の進展に応じて、広げたり深めたりしながらつなげていくことで、児童の学習意欲は持続し、資質・能力の育成につながると考えた。

4年生の総合「環境：もったいないから始めよう」の授業を例に挙げると、児童はまず「電気をつけっぱなしにするとどうなるのか」「水を流しっぱなしにするのはなぜよくないのか」といった身近な事実に基づく問いをもった。次に、教師の問い返しや友達との話し合いなどを通して、「どのくらいもったいないのか」「それを続けたらどうなるのか」と視点を広げ、数字や具体例に置き換えて考える問いへと発展した。さらに、全体での交流を通して「なぜ『もったいない』ことが起こるのか」「自分たちにできる工夫は何か」という実践的な問いへとつながった。最後に、「もっと調べたいこと」「これからやりたいこと」といった次の展開に向けた問いへと再設定され、探究を持続させる見通しをもつことができた。総合的な学習の時間においては、このように問いが変容し連続していくことで、児童は課題を自分ごととして捉え、生活や社会に生かせる学びへとつなげていくことができる。

3 実践の成果と課題

研究テーマである「子どもの主体性を育成する授業の創造」に関する児童の意識や捉え方を、数値化したデータから把握・分析して日々の授業改善に生かしたいと考え、全校児童に対して6月にアンケート調査を実施し、ほとんどの項目で7割以上の児童が肯定的な回答をしていた。

特に、総合的な学習の時間や生活科の授業に関する項目の「身近なことに注目し、自

分なりの問いを見つけようとしていること」「調べたり、見学・体験したりしたことを、自分なりに整理・まとめをしようとしていること」「学んだことを振り返り、新たな問いをもとうとしていること」についても、7割以上の児童が肯定的に捉えていた。これらのことから、自分の生活や地域に目を向け、疑問や関心をもつ姿が見られ、自ら課題を設定しようとする力が育ちつつあることが分かった。また、情報を集めるだけでなく、自分の言葉や表現でまとめる姿も多く見られ、これまでの研究の積み重ねが思考力や表現力の向上につながっていると考えられる。さらに、振り返りを通して、学習を次の課題へとつなげようとする意識が育まれており、「問いの連続性」に基づいた学習の積み重ねが成果として表れていると言える。

このように、課題設定と問いの連続性を重視した単元構成が、児童の主体性を育てる上で一定の効果を上げていることが確認できた。今後は、児童一人ひとりがさらに深く学んでいけるような指導の在り方を検討していく必要がある。

4 今後の展開

今後も、児童から出てきた疑問を解決していくという課題設定の工夫を積み重ねることで、「分かった」「できた」「自分たちで考えられた」「うれしい」「もっと知りたい」「もっと考えたい」「友達の意見も聞きたい」などのよいスパイラルが生まれ、児童自身に学習の主体性が出てくることを期待したい。また、課題解決に向かって主体的に追究し、児童同士で話し合い活動に取り組む過程で、「そんな考えもあるんだ」「友達の考えを聞いて、解決できた」「自分の考えが友達に分かってもらった」という喜びや達成感も生み出していきたい。